

2016 年度

「CBID 研修プログラム開発事業」

事業評価

報告書

公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

2018 年 3 月末

目次

1. 事業評価概要	1
2. 調査結果	
ア 研修実施主体者の調査結果	2
イ 研修参加者の調査結果	7
ウ 調査により発見したこと	13
エ 成果の背景（調査結果に関する考察）	14
オ 今後の事業への改善点	15
3. 総括コメント（本事業スーパーバイザー）	15
4. 主体者の感想	18
参考 アンケート項目	23
ロジックモデル	

1. 事業評価概要

【背景】

2016 年度日本財団のご助成により、「CBID 研修プログラム開発事業」*を松本市、富山県入善町、名古屋市で実施した。2016 年度事業について日本財団が助成事業の事業評価を実施するプロジェクトの一つに選ばれ、ロジックモデルの設定により事業の成果をアンケート調査及び聞き取り調査により明らかにした。事業評価は 2017 年度ご助成いただいた事業「誰一人取り残さない地域づくり」プロジェクトの一部として実施した。本報告書には 2017 年 12 月末までの動きをとらえており、それ以降の動きについては追記として記載した。

*CBID 研修プログラム開発事業とは、地域で困りごとのある人に対して自分が何ができるかを持ち寄り「できることもちよりワークショップ」（一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトおよび NPO 法人起業支援ネットのコンソーシアムにより開発）を中心として、地域で人と人とのつながりの再発見を目指すために開発した研修。世界保健機関（WHO）のCBID（地域に根ざしたインクルーシブ開発：域共生社会の実現）の考え方に基づいている。

【調査の手順】

1. ロジックモデル・指標作成：2017 年 2 月から 4 月まで、日本財団と当協会が作成
2. 調査の実施：2017 年 5 月から 2018 年 3 月末まで、当協会が実施
3. 調査方法：アンケート調査および訪問による聞き取り（インタビュー）調査および資料収集
4. まとめと報告書作成：2018 年 3 月末まで

【調査のための訪問日程】 2017 年-2018 年

日程	場所
第一回目訪問(実施主体)	
8 月 2 日、3 日	松本大学
8 月 21 日、22 日	工房あおの丘、入善
8 月 22 日、23 日	一般社団法人しん、名古屋
第二回目訪問(参加者)	
10 月 5 日、6 日	松本市内
10 月 17 日、18 日	入善近辺
10 月 18 日、19 日	名古屋市内
追加調査	
2018 年 2 月 8 日	松本市新村地区
同年 3 月 23 日	黒部

【調査対象・協力者】

1. 研修主体者に対する調査

① アンケート調査および聞き取り調査

- ・NPO 法人工房あおの丘、富山県入善町（以下入善）
代表理事：西島亜希氏
- ・松本大学および地域の関係諸機関、松本市（以下松本）
代表：松本大学観光ホスピタリティ学科 尻無浜博幸教授
松本大学特別調査研究員 一色美月氏、松本尚子氏
- ・一般社団法人しん、名古屋市（以下名古屋）
代表理事：本間貴宣氏
副代表理事：中山ちはる氏

2. 研修参加者に対する調査

- ① アンケート調査：各実施主体から参加者に送付（上記1-①）
- ② 3か所を訪問し、参加者各3人づつから聞き取り（インタビュー）調査を実施
人選は実施主体者が行った。

【実施体制】

- ・3か所の研修主体者（上記1-①）
- ・スーパーバイザー：NPO 法人起業支援ネット副代表理事 鈴木直也氏
（実施に関する助言、調査同行）
- ・公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会：上野悦子、堂西弥生

【調査の限界】

- ・3か所各地域の規模や特徴および研修参加者数が異なるため、統計を取ることは無理であったこと。
- ・参加者への聞き取り調査対象者数が各地域 3名づつに限られていた。しかしながら多くのことを語っていただけた。

2. 調査結果

ア 研修実施主体者への調査結果

A. 研修プログラムについて

①事業計画

入善：ある程度上手くできた。

松本：あまり上手くできなかった。（よく伝わらなかったため）

名古屋：ある程度上手くできた。

② キーパーソン発掘

入善：ある程度思い通りにできた。

松本：ほぼ思い通りにできた。

名古屋：あまり思い通りにいかなかった。（繋がっている人を引き寄せられたが、本当に来てほしかった人は参加しなかったため）

③ 事例作成

入善：ある程度上手く出来た。（ブレ研修が参考になった）

松本：ほぼ上手く出来た。（インターン生は5回以上事例作成のために集まった）

名古屋：ほぼ上手く出来た。

④ ワークショップ開催

入善：ほぼ思い通りに出来た（タイムキーパーの時間管理がうまくいった。開催に先立ちスタッフでブレ研修を実施したことがリハーサルに近い経験となった。改善につぐ改善を行い準備した。）

松本：ある程度思い通りに出来た。（来ていただきたい人に参加してもらえた）

名古屋：ほぼ思い通りに出来た。

⑤ フォローアップは効果的に行えているかどうかについて

入善：ある程度効果的に出来ている（参加者が工房あおの丘に立ち寄りやすくなった。困りごとを抱えた人へのフォローアップはあまり出来ていない。）

松本：あまり効果的に出来ていない。（①事業計画と連動する）

名古屋：あまり効果的に出来ていない（お礼状送付、お願いしたりされたりはあったがそれ以上のフォローアップのイメージがわかりにくかった）

⑥ ワークショップマニュアルは適切だったか。

入善：適切だった。

松本：適切だった。

名古屋：適切だった（セリフが入っていた）

⑦ プレ研修は適切だったか。

入善：適切だった（ブレ研修なしでは本番研修はできなかった）

松本：適切だった（これがないと本番研修はできなかった）

名古屋：適切だった。

⑧ スーパーバイザーやアドバイザーの助言について

入善：適切だった（事例作成ではアドバイザーから適切な指摘をいただいた。）

松本：適切だった（事例作成で丁寧なアドバイスをいただいた）

名古屋：適切だった。

⑨ 日本障害者リハビリテーション協会のサポートについて

入善・松本・名古屋：適切だった。

B. ワークショップ後の変化について（ロジックモデル3）

①参加者との関わりの変化

入善：あった。

富山県立高校とのかかわり（ワークショップに先生1名、生徒1名が参加。その後生徒3人がボランティアに参加。

JC（青年商工会議所）の人が「できもちWS」方式を取り入れて勉強会を行った。

商工会とのかかわり。

松本：あった。

相談されるようになった。（相談件数は、8月20日時点で約20件）

名古屋：あった。

3月：2時間程度、出来ることを出し合った。参加者34-35人。事例は実際のケースを取り上げた。

1月20日：地域の相談部会でワークショップを頼まれて開催。30人参加。事例はひとつ。

②参加者と一緒に何か動いたことについて（活動や取り組み）（ロジックモデル4）

入善：あった。

・2月14日に第三回輪つなぎ座談会が開催され、工房あおの丘の入善食堂で行われた。

35人参加、うちWS参加者は9人。あおの丘スタッフは4人参加。

・BS*にいかわ（異業種交流会）をWS参加者3人（うち一人は実施主体団体）で開始した。これまでの開催は4月7日、5月24日、7月28日、8月23日、その後も継続している。

*BSはバックスクラッチの英語のイニシャルで、背中のかゆいところをかきあうという会の趣旨を表してつけられた。

・3月4日 第7回地域福祉フォーラムでWS報告（工房あおの丘代表とスーパーバイザー）。参加者全員とできることもちよりWSを行い、たくさんの方の付箋が出された。

追記：BS にかわのその後の開催を訪問

2018年3月23日 BSにかわ開催地（黒部市北洋の館）を訪問。約20人参加。
BSにかわは、2016年秋から1年半前から継続しているゆるやかな異業種の交流会で、福祉事業所、介護関係、農家、会社員などが自由に参加できる。初参加の人と数回参加している人が交流することで顔の見える関係が作られている。

松本：あった。

12月27日 新村地区の夢を語る会（WS参加者が主催）

防災関係

11月19日 防災訓練（新村地区）WS参加者主催

8月5日 防災講演会

認知症講演会（あたらしの郷協議会いきいき部会主催）

6月8日 70名参加（住民50名、スタッフ20名）

7月9日 100名参加

追記：新村での追加WSの開催

2回目 2017年10月 ワークショップ開催（新しい民生委員などが参加）

3回目 2018年2月8日 実際のケースをもとに具体的な支援方針を出し合った。

背景のひとつとして、先進事例である一般社団法人草の根ささえあいプロジェクトが行っているケース会議に参加して学習した。

2017年度研修：11月12日（鎌田地区にて）

11月16日（奈川地区で自主開催、参加者19人）

鎌田地区でのフォローアップ：鎌田地区(2017年度実施)で11月28日に2回目の研修を開催。参加者43人。

松本大学インターン生から地域包括の人達に受け継がれる形で、具体的な支援を出し合う会議を開催。

名古屋：あった。

4月9日 午後 恋活パーティ開催（WS参加者が開催）、しんのカフェ、「かかぼ」にて。24人参加し、4カップル誕生。

6月24日 夏祭・映画祭開催（主催：しん）かかぼにて。中心はWS参加の2人の個人。参加者約100名。

9月23日 ミニ秋祭り開催、かかぼにて。

追記：しん主催によるスピーカースビューローにしんボランティアが参加。（2018年3月10日）
精神障害当事者の発表及びかかわる人たちの発表会で、研修参加者でしんボランティアもスピーカーとして登壇。200人参加。

③ WS開催で新しいつながりは生まれたか。（ロジックモデル3、4）

入善：あった。

高校生ボランティア。観光物産協会とのつながりとその進展。

松本：あった。

他地域の専門家、地域包括支援関係、生活困窮者支援、他市の社会福祉協議会。

2月の公民館会議でこのWSのことが話題になった。

名古屋：あった。

6月10日 名古屋医療専門学校から実習の申込があり実施された。（先生3人、学生3人）

12月20日 愛知医療大学の学生12人がしんで実習。うち1人はかかぼでアルバイトするようになった。

8月11日、12日 WSに参加した長野県立看護大学の哲学・倫理学の先生と交流。

同大学で開催された「食べる会」に参加。参加者は約60名。長野からもしん訪問。

その他問い合わせ多数。

④ 困りごとのある人の状態に変化はあったかどうか。

入善：あった。

サービスの選択肢が広がった。WS参加者の得意分野を知ること、現場で専門性を借りることになった。

松本：なかった。

名古屋：あった。

ボランティア部会（ムトレンジャー）に参加することで自ら変わっていった。

声かけが本人の変化を生むきっかけになることがインタビューでわかった。

⑤ 今後、ワークショップを開催したいと思うか。

入善：検討したい。

松本：近いうちに開催したい。具体的には2017年度3か所で実施（奈川、鎌田、新村）

名古屋：近いうちに開催したい。小規模のは開催している。

イ 参加者の調査結果

【回答数】

入善：100名中70名（70%）

松本：27名中22名（81%）

名古屋：50名中35名（70%）

① ワークショップに参加した動機（上位4つずつ紹介）

<u>入善</u> ：自分の活動のヒントを得られそうだったから	30%
主催者から誘われたから	24%
WSの新しい手法に関心があったから	21%
主催者のことをもっと知りたかったから	17%

<u>松本</u> ：主催者から誘われたから	72%
WSの新しい手法を知りたかったから	40%
自分の活動のヒントを得られそうだったから	40%
面白そうだったから	18%
誰かの役に立つ機会を求めているから	13%

<u>名古屋</u> ：主催者から誘われたから	59%
面白そうだったから	56%
自分の活動のヒントを得られそうだったから	56%
新しいひとたちとつながりたかったから	47%
WSの新しい手法に関心があったから	31%

インタビューでは、3か所ともWSに参加する以前からかかわりがあったことが述べられた。

② WSの進め方について

入善：とてもわかりやすかった（8%）、わかりやすかった（57%）を合わせて66%が好意的であった。

松本：とてもわかりやすかった（31%）、わかりやすかった（54%）を合わせて85%が好意的であった。

名古屋：とてもわかりやすかった（59%）、わかりやすかった（34%）を合わせて93%が好意的であった。

③ 困りごとのある人への理解が進んだかどうかについて（理解・認識増進・知識増加・気づき等）

(ロジックモデル1)

入善：とても深まった（20%）、やや深まった（70%）を合わせて90%が深まったという回答であった。

理由についての記述：事例から身近に感じた、専門家の視点、個人の住民としても視点をもつことへの認識が高まったこと。WSの最後のほうで提示される困りごとのある本人からのお手紙が効果を生んだこと。

松本：とても深まった（27%）、やや深まった（68%）併せて、95%が深まったと答えている。

名古屋：とても深まった（41%）、やや深まった（56%）を合わせて97%が深まったと答えている。

理由についての記述を設けなかったが、インタビューでは、「専門家の視点と住民が個人の視点で出し合うことが新鮮だったこと（入善）、WSの最後に用意された本人からのお手紙に衝撃を受け、事例に書かれた人のことを思うようになった（松本）などが挙げられた。

④ 困りごとのある人の力になりたいと感じたかどうか（意欲向上）（ロジックモデル2）

入善：以前よりとても強く感じるようになった（13%）、以前より感じるようになった（56%）を合わせて69%が意欲を示していた。以前と変わらないは29%。

記述回答を設けなかったが、インタビューでは、「リアルに出来そうと思い、モチベーションが上がった」、「どこにいてもなんとかしたい」、などが挙げられた。

松本：以前よりとても強く感じるようになった（13%）、以前より感じるようになった(54%)、を合わせて69%が意欲を示していた。以前と変わらないは31%。

名古屋：以前よりとても強く感じるようになった（41%）、以前より感じるようになった(38%)合わせて79%が意欲を感じるとの回答であった。また以前と変わらないは22%であった。

⑤ ワークショップに参加して、困りごとのある人に何か自分でできることが見つかったかどうかについて。

(ロジックモデル2)

入善：たくさん見つかった（9%）、少し見つかった（53%）を合わせて62%がなんらかのことがわかった。

松本：たくさん見つかった（9%）、少し見つかった（59%）を合わせて68%が見つかったと回答している。

名古屋：たくさん見つかった（13%）、少し見つかった（75%）を合わせて88%が見つかったと答えている。

記述回答とインタビュー結果は次のとおり。

入善：認識向上に関すること、考えたこと、意欲向上に関すること、つながりに関すること。

松本：認識向上に関すること。

インタビューで挙げられたこと：専門家でなくてもできると思った。個人プラス役職ですることの両方が大事。WS が意図的でないので好印象を持ったなど。

名古屋：認識向上に関すること、つながりに関すること、具体的内容。

インタビューでは、円卓会議、ボランティア部会への参加、恋活パーティ開催、就労体験の機会提供などが挙げられた。（詳細は主体者インタビューの結果をご参照）

⑥ 主催者との関わり方は変化したかどうかについて（ロジックモデル3）

入善：関わりが増えた（6%）、少し増えた（19%）を合わせて 25%が変化したと回答。変わらないと答えた人は 76%。

松本：関わりが増えた（0%）、少し増えた（22%）併せて 22%が増えたと回答したのに対し、変わらないという回答は（72%）。

名古屋：関わりが増えた(13%)、少し増えた（32%）と併せて 45%が増えたと回答したのに対し、変わらないという回答は 55%。

変わらないという回答について 3 か所へのインタビュー結果はいずれも共通しており、以前から関わりがあったので WS 後に取り立てて変化したことはない、という答えであった。

変わったと答えた人は以下の動きについて、と記述している。（詳細は、参加者からの回答をご参照）

入善：認識の向上

イベント（参加、企画、開催）

つながり（かかわりが増えた）

意欲の向上（日程があれば主催者行事に参加したい）

具体的な行動（製品購入、ボランティアに生徒が参加、話しかけることが増えた）

松本：インターン生に会合に同席してもらうことが増えた。

会った時や電話で教えてもらえるようになった。

希望（インターン生に来てほしい）

名古屋：交流の機会が増えた。

イベントへの参加（きらりの集い、しん主催のイベント、家族会、施設見学等）

声掛け

⑦ WS 後に主催者といっしょに何か動いたこと（活動や取り組み）はあったかどうかについて

（ロジックモデル4）

入善：ある、さらに計画中（0%）、ある（6%）、ないが計画中（10%）、ない（83%）

松本：ある、さらに計画中（4%）、ある（13%）、ないが計画中（4%）、ない（77%）

名古屋：ある、さらに計画中（16%）、ある（32%）、ないが計画中（0%）、ない（52%）

この回答からは、参加者がアクションまでとっている例は、入善と松本では無い、という回答の方が圧倒的に多いことがわかる。名古屋ではある、計画中を含めると48%という回答。

しかし参加者へのインタビューでは次のような回答がある。（詳細は参加者回答をご参照）

入善：・団体内部の研修を、WSと同じスタイルで開催した。

- ・外部の交流会（輪つなぎ交流会）への参加
- ・異業種交流会（BS にいかわ）の開催開始。あおの丘も発起人のひとり。以後継続して開催されている。
- ・商工会青年部との交流が継続して行われる。
- ・地域フォーラムが富山で開催された際、WS 実施者とスーパーバイザーが WS 報告を行った。地域フォーラム参加者全体に対して、できることを出し合うワークを行い好評を得たことが主体者からの聞き取り調査結果として挙げられる。

松本：・地域には様々な地域活動を行う部会や組織があり、そこで意見交換を行った。

- ・WS を継続し、どんな生活を送りたいかに視点を置くことにした。
- ・夢を語る会、防災訓練などが挙げられた。（詳細は主体者回答ご参照）

追記（5 頁参照）：

- ・新村（2016 年に実施した同じ地区）
2017 年 10 月 2 度目のワークショップ開催、
2018 年 2 月 8 日、3 回目の WS 開催。

名古屋：

- ・参加者が独自に関係者を集めて WS を開催し、好評だったとのこと。
- ・しん主宰の円卓会議、ボランティア部会（ムトレンジャー）への研修参加者の参加。
イベント参加・開催の事例（ボランティア部会、かかぼでのマルシェ、夏まつり・映画祭、恋活パーティ開催、襖・しょうじ貼ワークショップ、ライブ開催、哲学カフェ）
それらの開催のため、しんのカフェかかぼが拠点として、イベント開催などの場となっている。
- ・就業の機会を提供する人も出てきた（リフォームの現場での簡単な作業、民泊ベッドメイ
ク）

・参加した長野の大学教員が交流会を長野の大学で開催した時、しんの利用者、ボランティアが参加した。

⑧ ワークショップ後あなたが何かしたことについて（ロジックモデル5）

ア) 新しいつながりは生まれたかどうか（回答者本人の例として）について

入善：たくさん生まれた（1%）、生まれた（14%）の合計は 15%に足して、あまり生まれなかったは 27%、まったくなかったは 54%。

松本：たくさん生まれた（0%）、生まれた（36%）、合わせて 36%があったという回答。あまり生まれなかったは 36%、まったくなかったは 27%。

名古屋：たくさん生まれた（13%）、生まれた（50%）合計は 63%。あまり生まれなかったは 19%、まったく生まれなかったは 19%。

イ) 主催者以外の参加者と動いたことについて（ロジックモデル5）

入善：あるが計画中は 0%、あるは 4%、ないが計画中は 4%、ないは 87%。

松本：ある、更に計画中（4%）、ある（22%）、ないが計画中は 9%、ないが 54%。

名古屋：ある、更に計画中（16%）、ある（25%）、ないが計画中は 0%、ないが 59%。

記述回答は次のとおり。

入善：交流会などの企画に関する事など、主催者以外の作業所でのボランティア、施設見学など。

松本：地域包括との協力による認知症カフェ、地域包括ケア会議で WS を継続、地域の講演会の企画など。

名古屋：イベント開催（恋活パーティ、草の根ささえあいプロジェクトの実際の事例検討会への参加、円卓会議など）

ウ) WS がきっかけとなり、あなたご自身で動いたかどうか、について（ロジックモデル5）

入善：ある、更に計画中は 0%、あるは 14%、ないが計画中は 9%、ないは 76%。

松本：ある、更に計画中（0%）、ある（18%）、ないが計画中は 13%、ないは 59%。

名古屋：ある、更に計画中(19%)、ある(19%)、ないが計画中は 22%、ないは 41%。

記述回答は次のとおり。

入善：職場で WS を行い、好評だった。役場への提言、話を聞くこと、声かけ、ボランティアへの参加。老人会の事務局として新たに提案など。

松本：サロン、高齢者クラブ、手法をまねたグループワークなど。

インタビューで挙げられたこと：認知症カフェ開始、サークルの立ち上げなど。

名古屋：草の根ささえあいプロジェクトの実際の事例検討会に参加。家族支援の勉強会に参加。

恋活パーティ、ライブ開催、リフォーム現場での仕事体験。障子ふすま貼りワークショップ開催など。ワークショップ開催、情報として発信、ボランティア、企画など。

インタビューでは、円卓会議参加、長野での交流会参加、しょうじふすま貼り体験会に参加。

追記：スピーカーズビューロー開催 3月10日（6頁参照）

⑨ WSは今後の地域に役立つと思うか、について

入善：とても思う(21%)、思う(60%) 合わせて81%が好意的であった。

松本：とても思う(18%)、思う(59%) 合わせて76%が好意的であった。

名古屋：とても思う(44%)、思う(53%) 合わせて97%が好意的であった。

具体的な記述は次のとおり。

入善：働きかけがあれば参加するかもしれない。

松本：個人としての場合と役職を持つ立場では参加の仕方に違いがあった。

地域包括ケア会議で生活に密着したことで取り入れられそうな時に役立つと思う。

公民館で任意グループができそうと思うとき

他には、可能性を感じさせる記述があった。

⑩ 同じようなWSをいつか開催してみたいと思うかについて

入善：すぐやってみたい(1%)、いつかやってみたい(16%)、検討してみたい(50%)で合わせて77%が前向きであった。

松本：すぐやってみたい(4%)、いつかやってみたい(31%)、検討してみたい(50%) 合わせて85%が前向きであった。

名古屋：すぐやってみたい(6%)、いつかやってみたい(34%)、検討してみたい(44%) 合わせて40%が前向きであった。

記述回答は次のとおり。

入善：主体者から声をかけられたら参加しやすい。事例検討会の企画があり、主体者から誘いがあれば動く、というのはそれまでのつながりがあるから。

WSの次のステップについてできることが見えてきた。

本当の事例について検討する機会があれば、一度経験しているので行きやすい。経験していると全然違う。

追記：2017年度研修実施の黒部自立塾への開催支援（10月22日）

松本：二回目を行った。（新村）。同じのをやってみたい。

2017 年度開催（鎌田地区、奈川地区）を支援

名古屋：構想はある。相乗効果で地域を巻き込みたい。チャンスを作ればかかわりたい。

追記：障害のある人のライブ演奏会開催

ふすま障子貼り WS の 2 回目の開催（11 月）

2017 年度研修（大府市の精神科のある病院（2016 年参加者がいる）主催に関する支援を行った）

ウ 調査により発見したこと

1. 全体的なこと

- ・参加者へのアンケートへの回答率が高く、1 年前のことを書いてくれたり、インタビューで語ってくれた人が少なくなかった。
- ・実施した地域の規模や特徴が違ってても効果があらわれることがわかった。
- ・地域の実情に合わせてワークショップのやり方に工夫が見られた。
- ・主体者と参加者と異なる立場から同じ内容に対して回答しているが、事実に違いは見られず、それぞれの立場の考えを聞くことができた。

2. 研修プログラムと効果について

- ・説明会・プレ研修・ワークショップ準備（参加者への声掛け、事例作成）と開催・フォローアップという一連の流れには、その後の活動につながる要素が含まれている、ということがアンケート・インタビュー結果からわかった。ひとつひとつ丁寧にこなすことは、実施主体の自信やスタッフ養成としても意味があった（しん）
- ・専門性がなくても開催できることがわかった（松本のインターン生）

以下は研修の主な内容と波及効果として考えられること。

説明会：情報提供の第一ステップとして、ここでインパクトや期待をもった参加者がいた。

プレ研修：研修実施者が参加者として体験できた。

WS 参加者への声掛け：研修後を含む、地域での関係性の深まりに役立っていると推測できる。

事例作成：WS の成否を左右する大事な要素であることがアンケート結果からわかる。

参加者にとっては事例に触れることは障害のある本人と家族への理解を深める機会。

事例に対するフォーマル、インフォーマルに出しあうことで、参加者は対応体験を積んだ。

本番のファシリテーター：入善では主体者代表、名古屋では職員、松本ではインターン生が二人で工夫して行った。そのことから準備ができていれば、経験の有無、専門性の有無にかかわらず可能と言える。

フォローアップ：WS 一回で終わるのではなく、その後の進展を生むためには大事な要素である。

3 主体のうち、2 か所はプロジェクト開始時にはフォローアップのイメージがつかめなかったと回答されていたが、事業評価自体が、フォローアップへの意識を高めることにつながったことが感想から読み取れる。

3. 参加者の変化（主体者との関係を含む）

- ・主体者との関係が WS 後あまり変わらなかったという回答が多かったのは、すでに関係があるためという人が多いから、ということがアンケート回答からわかる。
- ・行動を起こさない人でも、主体者から声がかかれば参加する、と回答する人が少なくなかった。参加動機でも主体者から声がかかったから、と回答する人が多かった。
- ・研修参加者の行動に参加した人たちがいる。そのように波及した参加者も影響を受けたと言える。

4. 主体者の変化

- ・研修を実施することで、主体者の力が強まっている。（研修開催への自信、研修後の参加者や地域との信頼関係の向上、次のステップを考える、あるいは実施する等）
- ・参加者の動きは実施主体者の影響でもあり、相互の関わり合いが相乗効果を生んでいると言える。

5. 困りごとのある本人の変化

- ・今回の調査では変化を測るのは難しい、との判断（調査期間や関係性）から調査しないこととしたが、参加者へのインタビューから、困りごとのある人への声かけが普段から行われることにより本人の心の変化（励まされという感じ）が表れていることがわかった(名古屋)。
- ・本人の変化の調査については今後の課題とする。

Ⅱ 成果の背景（調査結果に関する考察）

成果が見られた背景として以下のようなことがアンケート結果から読み取れる。

- ・人が集まる場（拠点）があること

参加者との連携活動や参加者が対応することを可能にしている。

工房あおの丘：異業種交流会（BS にいかわ）の立ち上げと開催継続

松本：地区の自治組織、地域組織（地域包括支援センター）からの参加により地域に根づく可能性をもつ。（新村地区では3回のワークショップを開催）

しん：ボランティア部会、円卓会議、カフェかかぼがあることで、参加者が動きやすい。

- ・実施主体と地域住民との関係性

もとからあることが研修の理解の浸透に役立っていると思われる。

（関係性があることはアンケート回答からもわかる）

また、プロジェクト実施のプロセスにおいて、関係性がさらに醸成される仕組みがこの研修には内包されている、と言える。（事例作成、ワークショップへの参加の声かけなど）

・リーダーシップ

松本：地域のリーダーの理解が大きかったことで実施しやすくなったことが聞き取り調査でもわかる。

オ 今後の事業への改善点

① 普及に関すること

・研修実施地域を増やすことと研修を行う人材養成の継続が必要。

・研修実施者の選択について

2016年、2017年の実践から、地域の人たちと良い関係性があること、リーダーがわかっていることは研修の効果を生むためには不可欠では、ということがわかってきた。

しかし、そのような条件が整っていないが、研修を希望する地域で成果を生むためには、説明会や参加体験ができるような機会の提供を考える必要がある。

② 広報に関すること

・普及のためには広く知ってもらう広報の方法を検討する必要がある。

③ 持続発展性に関すること

・事業評価で実施したようなアンケート調査を実施地域で研修後に行うことで、成果を踏まえて次のステップを目指すことにつなげられるであろう。

・持続発展を研修実施時から考えられるように実施地域とともに検討したい。

以上文責：上野悦子、公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

3. 総括コメント、スーパーバイザー 鈴木直也氏

ア 3 地域の成果

ワークショップ後の3地域の動きには特徴的な違いがみられる。どのようなコミュニティ（つながり）が生まれたかという視点でみると、松本市新村地区（松本大学）は福祉的なテーマを中心に、最初は自らの組織から始めて、徐々に担い手を地域包括支援センターに移行しつつある。富山県入善地域（工房あおの丘）はテーマを特に決めず、最初から地域のキーパーソンが担い手となっている。名古屋市（しん）は福祉と住民ニーズが重なるところのテーマを設定し、キーパーソンがボランティア登録をして運営を担っている。

【ワークショップ後に生まれたコミュニティの比較】

	松本市新村地区	富山県入善地域	名古屋市
テーマ	福祉（困りごと）	参加者の関心	福祉+住民ニーズ
担い手	地域包括支援センター	キーパーソン	ボランティア（キーパーソン）
参加者	自治会+福祉関係	異業種	利用者+地域住民
場所	公民館	事業所外	事業所内
成果	困りごとのある人を支える地域の体制が具体的に整ってきている	自分たちの困りごとを持ち寄れる場をつくり、個別に様々な助け合いが生まれている	困りごとのある人への支援が具体的に行われ、暮らしやすさの向上につながっている

松本市新村地区は困りごとのある人を支える具体的な話し合い（ケース検討会）が行われており、ケースを重ねることで困りごとのある多くの人に具体的な支援を届けることができるようになると思われる。富山県入善地域はテーマを特に決めないことで異業種の多様な参加者が集まる場をつくり、信頼関係が深まる中で、お互いの困りごとを持ちこみ解決していく動きに発展している。名古屋市は困りごとのある人の具体的なニーズに応える動きが生まれ、そこに地域住民のニーズも併せて応えていくような動きになりつつある。

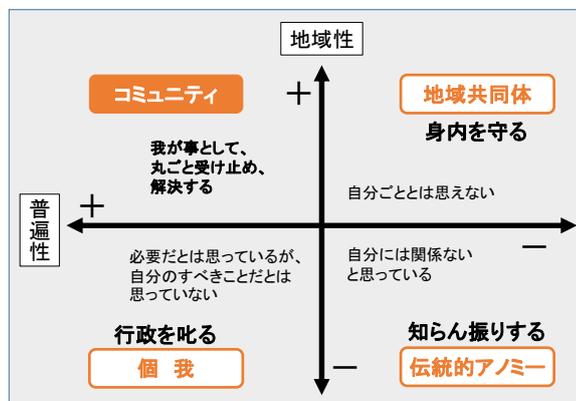
イ できることもちよりワークショップの効果

今回の事業の中心的となるプログラムは「できることもちよりワークショップ」の開催である。このワークショップが参加者にどんな影響を与えたのかを考察してみたい。

次の図は、奥田道大の「コミュニティ形成の理論と住民意識」に加瀬、鈴木が加筆したものである。

地域住民が知らん振りするのは、自分には関係ないと思っているからであり、行政を叱るのは、必要だとは思っているが、自分のすべきことだとは思っていないからである。また、身内を守るのは、自分ごとであるからであり、他人を守れないのは、自分ごととは思えないことが大きな理由である。できることもちよりワークショップにはこの住民意識の壁を取り払い、意識を変えていく効果があると思われる。具体的には以下のようなメカニズム

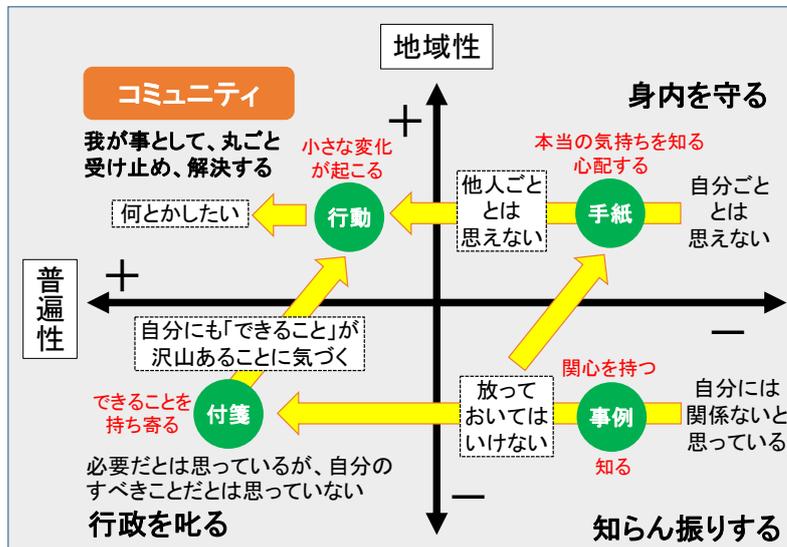
コミュニティの類型論（奥田）からの考察



奥田道大「コミュニティ形成の理論と住民意識」に加瀬、鈴木が加筆

が働いている。

できることちよりWSの成果の考察



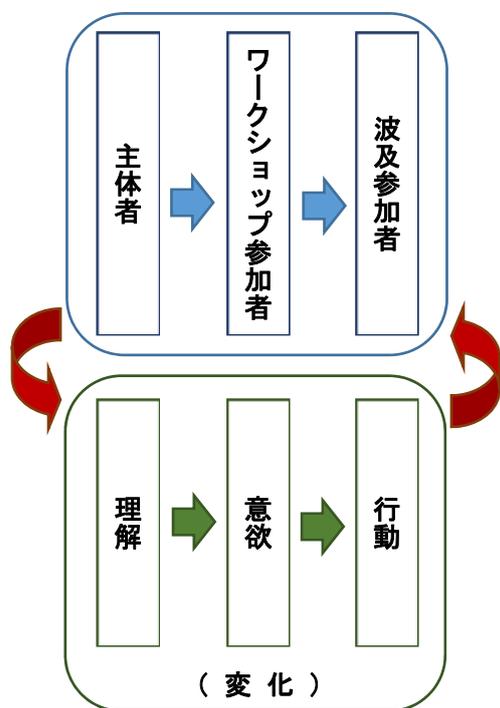
奥田道大「コミュニティ形成の理論と住民意識」に加瀬、鈴木が加筆

ワークショップでは事例を扱うが、この事例を考えることで、困りごとのある人を知って、関心を持つようになり、「放っておいてはいけない」という意識を芽生えさせる作用がある。ワークショップの参加者は自分のできることを付箋に書いて持ち寄る。この時、行政でなくても自分にできること、行政ではできないけれど「自分にはできることが沢山ある」ことに気づく。ワークショップの終盤に事例の本人から届いたという設定で手紙が参加者に配られた時、ワークショップ中ずっと考えてきた事例本人の本当の気持ちを知り、心配することで、もはや「他人ごととは思えない」という気持ちになる。そして、ワークショップの後、地域のなかで何か行動を起こしたとき、自分の行動で小さくても変化が起きることを実感し、「何かしたい」という意識が更に高まる。

ウ 事業全体の効果

最後に事業全体の効果とそのメカニズムについて考えてみたい。

【事業の成果を生み出すメカニズム】



この事業の最初の大きな効果は、主体者の意識と行動が最初に変化する点にある。ワークショップを準備していく過程で、理解も意欲もどんどん高まっていき行動へとつながっていく。先述のとおり、ワークショップ参加者もワークが進む中で、理解と意欲が高まっていき、行動へとつながる人が出てくる。主体者や参加者がワークショップ終了後に起こした活動に参加した人（波及参加者）も活動にふれる中で理解と意欲を高めて、中には行動に移す人が出てくる。

主体者は、ワークショップ参加者の行動に刺激を受け、より意欲を高め、積極的に行動に移すようになる。ワークショップの参加者も行動を起こすことで、より困りごとのある人への理解を深め、更に意欲を高めて行動につなげていく。このように、最初は主体者からの働きかけで始まった事業も、徐々にお互いに刺激を与えあって、より具体的で効果的な活動へと発展していく。

想いのある限られた人材や専門家だけでは、地域社会の中で困りごとを抱えている人の暮らしを向上していくことは叶わない。「誰一人取り残さない地域社会」を実現していくためには、誰一人無関心にならない、誰もが少しずつで良いから、できることを持ち寄って、お互いに支えあうという姿勢が大切である。ひとり一人が持ち寄れば、それほど大きな負担にならないことでも、それが出来なければ、地域はとも生きづらいところになってしまう。

この事業の最大の成果は、「ひとり一人ができることを持ち寄る文化」を地域に根付かせようとしている点にある。3つの地域は、主体者の立場も地域の課題も異なるが、図のようなスパイラルが確実に進んでいるように感じられた。今後どのような展開になっていくか、目を離さず、そして起きたことを更に検証していくことで、今後の日本の地域づくりの大きなヒントが得られるのではないかと思う。

4. 主体者の感想

① 松本大学 尻無浜博幸教授

松本市におけるできもちWSの具体的な展開方法は住民自治区を基盤に実施した。人口24万人を35地区に行政区分けしており、各35地区に公民館を始めとする地区の拠点建物が建物、人と配備されている。その地区の一つ（新村地区）にできもちWSを持ち込んだのである。専門職でない地区の役員にできもちWSを理解してもらうことは最初からつまづいた。地区には新しい手法を導入するほど余裕はな

いとのこと。できもち WS の実績（有効性）が少ないため一般人である地区役員さんに説明するのは困難であった。そのうち、松本大学の地元地区として、大学にお付き合いする程度で導入の可能性が少しずつ広がっていった。このような消極的な地域のテンポの中で突破口になったのが地域づくりインターン生の存在であった。彼女が時間をかけて、できもち WS と地区役員との結び付けを行った。「まずやってみましょう」的発想ではなく、導入時から時間をかけて合意形成を図っていくことが WS 当日の参加姿勢やその後の活用姿勢にまで影響することが分かった。（事業計画の段階であまり上手くできなかった（よく伝わらなかったため）。と評価した理由）

また、ワークショップに参加した動機の中で、「WS の新しい手法を知りたかったから」と「自分の活動のヒントを得られそうだったから」が共に 40%と上位であった。地域住民は自分の暮らしの中で隣近所の様子はよくわかっていて、当初「行政や警察に連絡する程度のこと」は自分のできることとしての意識はなかった。要するに「自分ができること」自体の認識がまちまちであった。そのような中で、WS 参加後に参加動機を聞かれた時、結果として上位 2 つが上がることは、助け合いの姿勢の高さがこの評価によって証明されたことになると判断できる。このことが明確になっただけでも地域においては大きい。

「地域づくりインター生を活用したできもち WS の展開」がもう一つの松本のテーマであった。地域前線において誰が進めるのかは重要な要素である。できもち WS の地域導入によって、本当に主体的な住民を創ることに繋がるのか？また、誰一人取り残さない地域社会づくりを目指すためには関わる人々の裾野を拡大する必要があるがそこへの貢献になるのか？は当初からの問いであった。そのためには日頃、地域にどっぷり関わっている地域づくりインター生の存在を通して地域住民への浸透度を測りたかった。また、普遍的な観点で誰が今後できもち WS を使いこなせるかの見極めも課題として掲げた。「進め方への感動があった。」とか「事例は、あたかも本人がいるような気がする。」などの意見では、事例の重要性と事例への住民の向かい方が伺える評価が得られた。「それまでに参加した WS はファシリテーターが誘導するが「できもち WS」は誘導性がない手法と感じた。」の意見は、与えられるものではない住民の気付きが伺えた。「専門家でなくてもできると思った。」「個人プラス役職ですることの両方が大事。」「WS が意図的でないので好印象を持った」から、地域での定着度はある程度のサポートがあれば可能ではないかと判断できる。松本の取り組みは他の 2 箇所と異なり、法人格のある支援団体でない危うさと柔軟さが評価に出ているのが特徴的である。

② 工房あおの丘、代表理事 西島亜希氏

2016 年に、この開発事業の一環として、中山間地域の対象として、「できることもちよりワークショップ」の開催依頼を受けた。

この開発事業の依頼を受けた時、工房あおの丘として、障害福祉サービスからの地域づくりを実践してきた活動経過に対する評価を行うことが出来る貴重な機会であること、また、評価を行うことで、今後の活動展開に対する指標も持つことが出来るのではないかと考え、この貴重な機会を逃す手はない、と感じた。

開催は、日本障害者リハビリテーション協会のご指導とご支援をいただいて、工房あおの丘のスタッフのみんなが協力し合って、無事に開催を終えることが出来た。

ここからの継続した指導として、地域でのつながりを広げていくこと、「できることもちよりワークショップ」は、地域づくりのツールであって、一度きりの事業目的ではないことをお聞きしており、この流れを次へつなぐ、という任務を受けることになったが、この開発事業の大切な目的と方向性を理解して、地域の力をしっかりとつないでいきたいと考えた。

「できることもちよりワークショップ」開催から一年が経過して、評価事業として参加者の方にアンケートを取ることとなったが、この業務は、つながりを確認する良い機会を与えていただいた。

このアンケートのやりとりが、「できることもちよりワークショップ」に参加していただいたことを振り返っていただく(思い出していただく)機会とする事が出来たこと、また障がい者が地域で共に暮らしていることをあらためて実感していただく機会とすることが出来た。

工房あおの丘の一員とつながることが、どういった意味があることかを私たちからあらためてお伝えすることが出来るチャンスでもあり、今後の私たちとのつながりが、どんな意味を持つものかをお伝えすることも出来た。

参加していただいた方の力を、地域が必要としていることを、あらたに伝えることで、また、そのご本人の意識を高めていただくことにつながったのではないかと感じた。

私たち工房あおの丘の「できることもちよりワークショップ」の開催に参加していただいた方に、あらためて2017年の、特定非営利活動法人宇奈月自立塾の皆さんの開催に参加していただくお誘いも行った。参加率は、高くなかったが、2回目の参加をしてくれた方もおられた。また、2016年の開催には参加できなかった方が、今回は参加出来る、ということで新規の参加者の獲得も得ることが出来た。

この事業に関わることが出来て、感じていることは、それぞれに地域で暮らしてる人は思いを持っていらっしゃる方がしっかりおられることに気づくことが出来、その思いのある方々をつなぐための、形にするツールが不足していることを確認することが出来た。

その形にする力の一助になる事が必要なのではないかと感じ始めている。

私たち工房あおの丘の組織が、それらの一助になることが出来るよううごきを構築していくことを今後は考えていきたい、と感じている。

そのながれにつながることを願って、西島が実践していることとして、地域のつながりづくりを目指して「BSにいかわ」の開催を、2017年から始めることが出来た。

地域の人間が地域を知る、地域の人を知る、ということを開催の主旨として有志3名から行い、現在10回目の開催となっている。

現在の主催者2名で、毎月1回開催を目標としている。

「BS」は、「バックスクラッチ」の略であり、「バックスクラッチ」とは、「背中をかきあう」という意味がある、とのこと。自分が手の届かないところを助け合う、という意味にとらえることができ、この「BSにいかわ」を、お互いに助け合う、手をつなぎ合う、力を貸し合う、という主旨ととらえて、地域力を高めていくことを目指しているところ。

西島が主催として参加することで、障害福祉の分野へは、支援者をつなぐ、インフォーマルな視点で、地

域の力を発掘することを目指しているところ。

主催者それぞれに、自身の目的が違っており、その目的が達成されることによって、お互いにあらたな力の、可能性の創出につながっていくことを期待したい。

この富山県で、CBID 開発事業のうごきが起こっていることを、広く周知したいと考えて、2017 年には、「第 7 回 地域福祉フォーラム inTOYAMA」にて、西島から報告をさせていただき、「できることもちよりワークショップ」について、広く知っていただくことが出来た。

障害福祉分野に関わる多くの皆さんに、このワークショップの主旨をご理解いただいて、このワークショップが、地域の力の掘り起こしとなり、地域力を高めるひとつのツールになることを知っていただくことが出来た。

2018 年の「第 8 回 地域福祉フォーラム inTOYAMA」では、制度のはざまに落ちた若者たちの支援、というテーマで、今回の CBID 開発事業のアドバイザーである、特定非営利活動法人 起業支援ネット 副代表理事である鈴木直也氏をコーディネーターに迎え、特定非営利活動法人 宇奈月自立塾 牟田光生氏 からの報告をいただいた。

「できることもちよりワークショップ」の開催にかかる報告とは直接的なつながりはないが、地域の困りごとを抱えた若者をどのように支援していくことが必要なのか、地域でのサポートについて考える機会を提供していただいた。

これらの活動のながれから、是非今後も、この事業の継続を、特定非営利活動法人 宇奈月自立塾の皆さんと一緒に考えていきたいと思っている。

そのためにも、この事業継続のためのご協力を今後もいただきたいと感じている。

「我が事・丸ごと」地域共生社会づくりの動きと合わせて、地域の開発ツールとして活用していきたいと願っているところである。まさに、「誰一人取り残さない地域社会づくりプロジェクト」とリンクしていくのではないだろうか。

③ 一般社団法人しん代表理事、本間貴宣氏

今回の事業評価の結果を受けての率直な感想は、「地域社会で困りごとのある人が暮らしやすくなるための方策は、実に多様であり、支援者の想像を遙かに超えたものであった。」というものでした。しかしながら、本事業の地域における波及効果については、その効果があまりにも自然な流れの中で展開されている為、評価者の方に聞かれて初めて気づくことが多かったことは先に述べさせていただきたいと思います。以下、私たちが評価結果から得られた 2 つの気づきを中心について記載したいと思います。

1 つ目は、「地域には精神障害者の社会生活について一緒に考えてくれる人がいる。」という驚きの気づきです。ワークショップの開催にあたり事前準備が不十分であったこともあり、私たちが参加を熱望していたキーパーソン（多くは、支援者・専門家などすでに精神障害に関心が高い方）には期待したほど多くご参加いただけませんでした。しかしながら、この結果が、皮肉な形ではありますが、私たちに「自分たちが気がついていないだけで、地域には困っている人の為に何か役に立ちたい。」と秘めた思いを持っている方が

いることを教えてくれました。換言すると、私たちが地域に対して「精神障害者の社会生活について一緒に考えてくれる人なんかいない。」と偏見を持っていたのかもしれませんが。このような志をもった貴重な存在を地域社会の中から掘り起こせたことが、本事業の最大の成果であり醍醐味でもあったのではないかと考えております。

2 つ目は、「地域支援の在り方は、支援者の限界を遥かに超える。」という戸惑いの気づきです。ワークショップに参加して一時的に精神障害者の社会生活に関心を寄せてくれるだけではなく、その後、具体的に行動を起こしてくれた人が少なからず出てきました。その具体的な行動の内容が私たちでは「できなかったこと」や「思いつかなかったこと」だったのです。恋活パーティしかり、お仕事体験会しかり、襖・障子張り替えワークショップしかり、夏祭り、マルシェ等々です。いずれも私たち支援者の限界を超える取り組みばかりでした。ワークショップの開催から 1 年以上たった今、2018 年 3 月 10 日には当事者の体験談を聞いて、共生社会の在り方についてパネリストとともに考えるイベント「スピーカーズビューロー」を開催しました。企画・運営からワークショップ参加者の方にもご協力いただき、参加者の方がお声掛けいただき 3 名の企業（飲食店経営、IT 関係、建築関係）の社長さんにもご登壇いただきました。結果的には、精神障害者の地域生活の在り方を考えるという狭い業界のイベントにも関わらず 200 名を超える方にご参加いただけました。精神障害について関心の高い方は勿論ですが、全く関わりのない方にも多数ご参加いただけましたことが主催者としては大変満足しています。このようにワークショップの考え、C B I D の考えは 1 年以上たった今もここ名古屋には色濃く残っており、その波及効果は私たち自身もはや推し量ることが困難です。

以上の二点、①「地域には秘めた志を持った方がいること」、②「地域支援は、支援者の限界を超える」が何故本事業から引き起こされたのかを振り返りますと、起爆剤となったワークショップの内容であったように思います。従来のワークショップとの決定的な相違点は、困りごとや障害を中心とした取り組みではなく、架空ではあったとしても同じ地域で生活をする「人」を中心とした取り組みであることが大きいと考えます。立場や専門性は関係なく、参加者は皆対等に目の前の困っている人のために、自分に何ができるのかをただ一緒に考えたわけです。限られた時間ではありますが、この体験こそが参加者の中の秘めた志を奮い立たせ、具体的な行動へと背中を押したのではないのでしょうか。困りごとを持つ人が、人と人をつなぎ、そこに新たな活動を生じさせたように感じてなりません。私たちもこれまで、自分たちの中では精一杯「支援」をしてきたつもりではいました。しかし、「私たちの支援」の限界を超えた活動を目の当たりにしたいま、今後は「地域における支援とは何か？」と新たな課題に取り組むべく気持ちを新たにしています。

最後にはなりませんが、関係機関の皆様には、私どものような駆け出しの支援団体にこのような貴重な機会を頂戴しましたことに心より厚く御礼申し上げます。

参考：アンケート項目

1. 実施者向け

昨年研修を実施された代表の方への質問

【A 研修プログラムの内容についてお答えください】

① 事業計画は上手く作成できましたか。

1. ほぼ上手くできた 2. ある程度上手くできた 3. あまり上手くできなかった 4. 全く上手くできなかった

② キーパーソンの発掘は上手くできましたか。

1. ほぼ思い通りにできた 2. ある程度思い通りにできた 3. あまり思い通りにいかなかった 4. 全く思い通りにいかなかった

③ 事例の作成は上手くできましたか。

1. ほぼ上手くできた 2. ある程度上手くできた 3. あまり上手くできなかった 4. 全く上手くできなかった

④ ワークショップの開催はうまくできましたか。

1. ほぼ思い通りにできた 2. ある程度思い通りにできた。 3. あまり思い通りにいかなかった 4. 全く思い通りにいかなかった

⑤ ワークショップ後のフォローアップは効果的に行えていますか。

1. 効果的にできている 2. ある程度効果的にできている 3. あまり効果的にできていない 4. 全く効果的にできていない

⑥ ワークショップマニュアルは適切でしたか。

1. 適切だった 2. まあまあ適切だった 3. あまり適切ではなかった 3. 全く適切ではなかった

⑦ プレ研修は適切でしたか。

1. 適切だった 2. まあまあ適切だった 3. あまり適切ではなかった 4. 全く適切ではなかった

⑧ スーパーバイザーやアドバイザーの助言は適切でしたか。

1. 適切だった 2. まあまあ適切だった 3. あまり適切ではなかった 5. 全く適切ではなかった

⑨ 日本障害者リハビリテーション協会のサポートは適切でしたか。

1. 適切だった 2. まあまあ適切だった 3. あまり適切ではなかった 6. 全く適切ではなかった

【B ワークショップ後の変化についてお答えください】

① 参加者との関わりに変化はありましたか。

1. あった 2. なかった

見つかったことはどんなことですか。

2. 参加者向けアンケート項目

【① ワークショップへ参加した動機を教えてください。（該当することすべてに○をつけてください。）】

1	主催者*から誘われたから
2	ほかの参加者から一緒に参加しようと誘われたから
3	主催者のことをもっと知りたかったから
4	面白そうだったから
5	ワークショップの新しい手法に関心があったから
6	自分の活動のヒントを得られそうだったから
7	誰かの役に立つ機会を求めていたから
8	新しい人たちとつながりたかったから
9	その他

*主催者とは、この度、ワークショップを準備し、当日進行を主に担当した x x 様を示します。

【② ワークショップの進め方はどうでしたか（時間配分や方法）。】

4. とてもわかりやすかった 5. わかりやすかった 6. ややわかりにくかった 7. わからなかった

【③ ワークショップに参加して事例にあったような困りごとのある人への理解は深まりましたか。】

1. とても深まった 2. やや深まった 3. あまり深まらなかった 4. 変わらなかった

【④ ワークショップに参加して困りごとのある人の力になりたいと感じましたか。】

1. 以前よりとても強く感じるようになった 2. 以前より感じるようになった 3. 以前と変わらない 4. 以前より感じなくなった

【⑤ ワークショップに参加して困りごとのある人に、何か自分にできることが見つかりましたか。】

4. たくさん見つかった 5. 少し見つかった 6. あまり見つからなかった 7. 見つからなかった

（4以外を選ばれた方へ）

見つかったことはどんなことですか。

【⑥ ワークショップを実施した主催者*との関わり方は変わりましたか？】

1. 関わりが増えた 2. 関わりが少し増えた 3. 変わらない 4. 関わりが減った

(1もしくは2を選ばれた方へ)

それはどんなことですか。

【⑦ ワークショップの後、実施した主催者*と一しょに何か動いたこと（活動や取り組み）はありますか】

1. ある。更に計画中 2. ある 3. ないが、計画中 4. ない

(4以外の方へ)

それはどんな動きですか。

【⑧ ワークショップの後、あなたご自身が何かした例があれば教えてください。】

ア) ワークショップの後新しいつながりは生まれましたか。

1. たくさん生まれた 2. 生まれた 3. あまり生まれなかった 4. まったくなかった

(4以外の方へ)

それはどんなつながりですか。

イ) 主催者以外の参加者と何か動いたこと（活動や取り組み）はありますか。

1. ある。更に計画中 2. ある 3. ないが、計画中 4. ない

(4以外の方へ)

それはどんな動きですか

ウ) ワークショップがきっかけとなり、あなたご自身で動いたこと（活動や取り組み）はありますか。

1. ある。更に計画中 2. ある 3. ないが、計画中 4. ない

(4以外の方へ)

それはどんな動きですか

【⑨ ワークショップは地域の今後役に立つと思いますか？】

1. とても思う 2. 思う 3. あまり思わない 4. 思わない

【⑩ 同じようなワークショップをいつか開催してみたいと思いますか？】

1. すぐにやってみたい 2. いつかやってみたい 3. 検討してみたい 4. 思わない

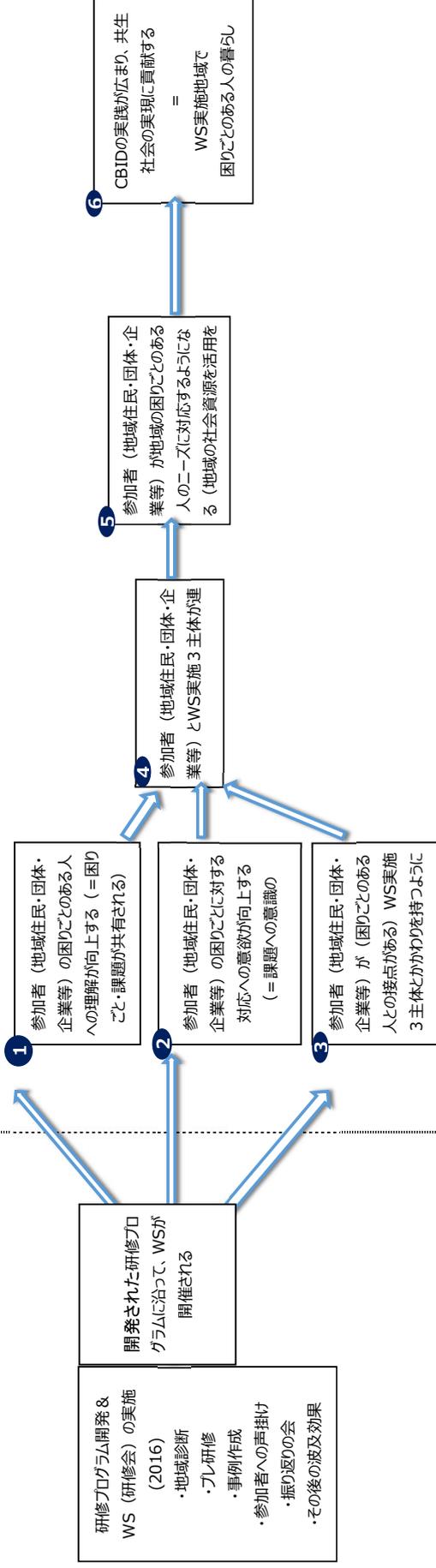
【⑪ ワークショップ参加にあたり感じた事をお聞かせください】

以上。

事業活動
(活動・アウトプット)

長期的目標の実現に至る道筋
(短期的・中期的アウトカム)

長期的目標
(長期的アウトカム)



指標(例)

1. 参加者の地域の困りごと/課題に関する理解度の変化 (参加者への質問紙調査)
2. 実際の困りごと事例の対応への意欲度の変化 (参加者への質問紙調査)
- 3-1. 参加者とWS実施3主体の関係性の変化 (参加者への質問紙調査&実施団体への質問紙/インタビュー調査)
- 3-2. WS開催前の地域診断、概念図WS実施直後～1か月後程度
4. WS実施3主体の連携行動の変化 (参加者への質問紙調査&実施団体への質問紙/インタビュー調査)
5. 実際の困りごと事例に対する対応事例 (実施団体への質問紙/インタビュー調査)
6. 指標なし

評価のタイミング

WS実施直後～1か月後程度

WS実施後6か月程度

WS実施後1～2年後程度

問い合わせ先：

公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会 上野悦子、堂西弥生
電話 03-5292-7628、Fax03-5292-7630、kokusai@dinf.ne.jp

この報告書は日本財団のご助成により作成しました。

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION